

「がん哲学外来」を提唱する病理学者

ひと

ひの おきお
樋野 興夫 さん(55)

カルテはない。検査結果は見ない。診療でもない。

そんな外来を昨年、病理・腫瘍学教授として勤める順天堂大の病院に3カ月限定で設けると、がん患者や家族から「受診」希望が相次いだ。その後もボランティアや健保組合などの運営で毎週末、首都圏で開く。各地への出前も多い。「病院外、それも喫茶店がいいのです」

悩みを聞き、青年期から愛読する政治学者、農学者、がん研究者の著作や、体験から生まれた「人生の言葉」を探る。時に、ドキッとするような言葉。「あなたにはまだ、死ぬという大切な仕事が残っている」治療法が尽きると、患者を診なくなる専門病院も多い。がん医療にも哲学が必要だ、と感じる。NPOを

設立し、記念シンポジウムを皮切りに広がりを目指す。

島根県の無医村に生まれ、医師を志した。だが、なまりに引け目を感じ、患者を診る臨床には進まなかった。以来30年、顕微鏡でがん細胞をみて悪性かどうかを見分けたり、発生病を研究したりしてきた。

転機は05年、アスベスト(石綿)が原因のがん「中皮腫」の患者を診療したこと。診断に役立つ腫瘍マーカーを開発したのが縁だった。

職場で石綿を吸い込み、数十年後に発病、すでに末期の人も少なくなかった。心の手当てに必要なのは、励ましや慰めではなかった。「患者が自らを掘り下げて考え、がん向き合うための言葉だったのです」

文・岡本峰子 写真・杉本康弘